

探究と問答法の前に

— アリストテレスをめぐる反発展史的解釈についての断想 —

赤井清晃

【キーワード】 アリストテレス・ディアレクティケー・解釈・発展史

1. アリストテレスの思想に関する、いわゆる発展史的解釈に依拠しないで、アリストテレスのテキストの解釈を試みた、今は亡き Wehrle (p.1) によれば、アリストテレスの思想に関する、いわゆる発展史的解釈に共通しているのは、『カテゴリーアイ』（特に、第5章の実体論）が、『形而上学』の初期の形をなす理論であって、この初期の理論は後になって、すなわち、『形而上学』においては、破棄されたという想定に基づいている。しかし、古代の注釈家たちは、一致して、『カテゴリーアイ』は、意味論的な観点に立つ論巧であって、形而上学的ではなく、従って、『カテゴリーアイ』における実体論と『形而上学』における実体論の間には、齟齬はないという見解をとっている。彼ら、古代の注釈家たちは正しかったのであって、これに対して、現代のアリストテレス解釈者の想定は、中世的な間違いに基づいており、それは現代哲学の反形而上学的な姿勢によって永続的なものとされてきた、という。このことを、部分的にはあるが、論証することが、Wehrleの著作の目的のひとつであった（もっとも、その論証は、部分的に、とことわられているし、おそらく、未定稿のまま残されたものが、Wehrleの死後、出版されたので、それがどこまで果たされているかは心もとない）。

2. Wehrleが、中世的な間違い (a medieval mistake) というとき、いつの、誰の、どの著作に基づいてそういうのか明らかではないので、この点に関して、Wehrleの主張をそのまま受け入れることはできないが、少なくとも、次のような論争、あるいは、アリストテレス解釈の争いがあったことを指摘することはできる。例えば、Gualterus Burlaeusは、その『アリストテレス「カテゴリーアイ」註解』（*In Praedicamenta Arist.*）の中で、

Ideo dicendum quod scientia hic tradita est de rebus, scilicet de decem rebus primis; ... de vocibus determinat ex consequenti et non principaliter. (cod. Cantabr., St. John 100, f.55r)

それ故、次のことが知らなければならない。すなわち、ここにおいて学は、事物について、すなわち、第一の十の事物について、述べられている。（中略）アリストテレスは、

その結果として、ことば（音声）について規定しているが、それは、それを主たるものとしてではない。

と述べており、明らかに、アリストテレスの『カテゴリーアイ』は、第一の十の事物（範疇）といわれる、事物、すなわち、ものそのものを扱っているのであって、ことばを扱っているのではない、という解釈をとっている。しかし、おそらくは、このような解釈をとる人々に対して、Ockham (p.136)は、

Et ignorantia istius intentionis Aristotelis in hoc libro facit multos modernos errare, credentes hic multa dicta pro rebus, quae tamen pro solis vocibus ...

そして、この著作（『カテゴリーアイ』）におけるアリストテレスの意図についての無知が、現代の（すなわち、Ockhamと同時代の）多くの人々を誤らせている。その多くの人々は、この著作で語られる多くの事柄が、ただ、ことばだけを指しているのに、事物を指していると信じているのである…

と述べて、同時代のアリストテレス解釈者を批判している。このようなOckhamの批判を受けることになるアリストテレス解釈者として、例えば、先に言及したGualterus Burlaeusをあげることができようが、Ockham自身の解釈はどうであろうか。

3. Ockham自身 (pp.135-136) は、Boethiusの『アリストテレス「カテゴリーアイ」註解』を引用して、次のように述べている。

Circa primum sciendum est—sequendo dictum Boethii in Commento suo—quod “in hoc opere haec intentio est, de primis rerum nominibus et de decem vocibus res significantibus disputare; ...”. Unde sciendum est quod principalis intentio in hoc libro est de vocibus res significantibus determinare.

第一の点をめぐっては、以下のことが知らなければならない。すなわち、ボエティウスが、『アリストテレス「カテゴリーアイ」註解』で述べていることに従って、「この著作（『カテゴリーアイ』）の意図は、以下の通りである。すなわち、事物の第一の名前について、および、事物を意味表示する十のことばについて、論じること。（中略）」そこからして、次のことが知らなければならない。すなわち、この本（『カテゴリーアイ』）の主たる意図は、事物を意味表示することばについて規定することである。

以上は、いわゆる中世という表現で簡単に片付けられてしまう時代の文献の中のほんの一例をあげたにすぎないが、Wehrleの言う中世的な間違いと思われる解釈と、それを批判する解釈とがあったことが知られる。Ockhamのことばによれば、それは多くの人々にあったようであるが、問題はむしろ、アリストテレス—古代の注釈家—Ockhamらの線ではなくて、その解釈を歴史的に受け継いだのかどうかは定かではないが、Gualterus Burlaeusら—現代哲学の反形而上学的な姿勢の線のほうにあると思われる。

4. またさらに、Wehrleは、彼自身が、logico-semantic distinctionと呼ぶ区別を用いれば、発展史的観点によらずに、『形而上学』Z巻、H巻の齟齬が解消されるという。Wehrleが注目する区別は、アリストテレス自身が、λογικῶς（言語形式上は、ことばの上では）という表現によって、他の著作・講義録でも行なっている区別であるという。我々の関心は、『形而上学』諸巻の解釈上の問題よりも、Wehrleが、logico-semantic distinctionと呼ぶ区別とディアレクティケー（διαλεκτική, 問答法）との関連にある。Wehrle (pp.56, sqq) は、学的探究（ζήτησις, scientific inquiry）とディアレクティケーを区別する。その上で、従来の多くの研究者の解釈に対して、異を唱えている。

5. 解釈者の多くは、アリストテレス自身のλογικῶςという表現は、ほぼ、dialectical（文法的に正確に言えば、dialecticallyとするべきだろうが、Wehrleは、こう記しているらしい。というのも、死後出版のため、Wehrleの校正を経ていないからである）、すなわち、「問答法的（に）」と訳してよいというのである。そうだとすれば、ここで、何故、アリストテレスは、διαλεκτικῶς（問答法的に）と言わなかったのか、という疑問が生じる。アリストテレスのテクストに即して、詳しく言えば、用語上の問題として、アリストテレス自身が自ら積極的な意味でのディアレクティケーを用いるときには、そもそも「ディアレクティケー」という語を用いず、却って、消極的な意味でのディアレクティケーのみを用いるディアレクティコイを批判する際には、「ディアレクティコイ」（ディアレクティケーを用いる人々）という名称を用いているということと関係があるかもしれない。それは、アリストテレスのディアレクティケーに関連する用語の用法上の区別であって、「ディアレクティケー」とその関連語が用いられるとき、積極的に肯定すべきものとして、ディアレクティケーが論じられる文脈（『トピカ』の記述の多くがこれにあたる）と、否定的に批判すべき対象として、ディアレクティコイが言及される文脈（例えば、『形而上学』Γ巻第2章など）とがあり、ここに少なくとも二種類のディアレクティケーが区別されるということを指摘できる（ただし、これは後述する、Wehrleの区

別する2つのディアレクティケー、すなわち、aporetic dialecticとpeirastic dialecticの2つのあり方とは異なる)。

この点は、ディアレクティケーについて論じている従来の研究の多くが明確に意識しているとは思われない。例えば、学問としての第一哲学のためにアリストテレスが展開した“strong dialectic”と、『トピカ』等で述べられている“pure dialectic”を区別する (Irwin, p.19, passim) という解釈があるが、この解釈は、必ずしもテキスト上の根拠が明確でない、として多くの人から批判されている (例えば、Cleary, p.199, n.2, 或いは、Smith (1997), p.xviii) が、ここで、少なくとも二種類のディアレクティケーが区別されるというとき、それは、Irwinの“strong dialectic”と“pure dialectic”という区別とも異なる。また、Smithは、アリストテレス以前に現に行われていた“dialectical argument”と、アリストテレスが『トピカ』で提示している“an art of dialectic”との区別を強調し、Brunschwig (p.189) は、P.Aubenqueにコメントする中で、学的論駁をこととする“supra-dialectique”と、学的論駁に至らない“infra-dialectique”の区別に言及しているが、ここでいう二種類のディアレクティケーの区別は、これらとも異なる。この用語法の問題について、ひとつの推測をすることが許されるならば、次のように言うことができるかもしれない。すなわち、従来の解釈において、アリストテレスがディアレクティケー的な手法で考察を行なっていると看做される箇所、例えば、「アクラシアー論」(EN, VII, c.1)や「場所論」(Phys. IV)では、アリストテレス自身は、「ディアレクティケー」という言葉を使わない。このことは、逆説的であるが、アリストテレス自身が、(単なるディアレクティコイの術としての)「ディアレクティケー」という言葉を使わないが故に、却って、アリストテレスは、哲学者の用いる方法としての「ディアレクティケー」を用いているということの証拠と言える。この立場は、アリストテレスのディアレクティケーを方法として擁護しようとするBoltonに対して、アリストテレス自身が積極的な意味で「ディアレクティケー」という言葉を用いないことを理由に、これを認めないDevereux (p.286, n.58)に真っ向から対立する。アリストテレスは、ディアレクティコイの術としての消極的なディアレクティケーと自らの用いる方法が、争論を意図せず、真理に到達することを意図しての吟味・論駁であるか否かという点と、実体そのものを考慮しているか否かという点において、根本的に異なっているが、明確にこれらの点を自覚していなければ、そのディアレクティケーは容易に、単なるディアレクティコイの術に墮してしまふことを意識していたからである。

6. しかし、ともかく、彼らの解釈するように、λογικῶςという表現は、ほぼ、「問答法的 (に)」と訳してよいとすると、次のような問題が起こる。彼らの解釈に従うならば、λογικῶςとことわった上で行なわれる、アリストテレスの論述 (『天体論』、『生成消滅論』、『動物部分論』などがあげられる) が、dialectical (問答法的) であるとしても、そもそも、λογικῶςとことわら

れる以前から、アリストテレスの論述は、ἀπόδειξις (論証) 的、すなわち、学的論証ではなくて、dialectical (問答法的) であると解釈されている。しかし、それでは、アリストテレスは、もともと、行なっているdialectical (問答法的) な考察を、(別の) dialectical (問答法的) な考察を行なうために、中断する、ということになり、これは奇妙なことではないか、というのである。従って、λογικῶςという表現が、何らかの意味をもつとすれば、それが、dialectical (問答法的) という意味をもたないで、別の意味をもっているか、あるいは、それが、dialectical (問答法的) という意味で言われているとすれば、λογικῶςとことわられる以前から、行なわれているアリストテレスの論述が、実は、dialectical (問答法的) ではない、何らかの方法によっている、という可能性がある。その際、その方法は、ἀπόδειξις (論証) 的、すなわち、学的論証であるとは認めがたい (そもそも、そうであるからこそ、この部分の論述も dialectical (問答法的) である、との解釈がなされてきたのであった) から、少なくとも、学的論証ではなく、また、dialectical (問答法的) なものでもない、何か別のものであるのではないか、ということになる。

7. ここで、Wehrle(pp.57, sqq)は、やや強引に、dialectical (問答法的) な推論は、通念ἐνδοξαに基づき、学的探究の推論は、現象φαινόμεναに基づくとして、これら2つを区別している。本来ならば、通念ἐνδοξαと現象φαινόμεναの関係を、その一致する部分の有無も含めて、問題としなければならないところだが、これらは区別されるものとして、問題にされないままである。彼はさらに、問答法διαλεκτικήそのものに、aporetic dialecticとpeirastic dialecticの2つのあり方を認める。これらいずれもが、学的探究にとっては有用であるが、学的探究そのものとは区別される。前者 (aporetic dialectic) は、アリストテレスの「哲学」、それも特に『形而上学』の方法としては、すでに「アポリアー (難問)」の方法が指摘されている(Lugarini, pp.131-156) が、ディアレクティケーは基本的には、「対人論法」であり、たとえ、一人の人物が考察する場合も、論敵を想定して、その論敵の主張を吟味・論駁するというスタイルをとるのに対して、「アポリアー (難問)」の方法は、基本的に、一人の人物が単独で考察するというスタイルをとる点で、異なっている。両者の関係は、なお、別途に考察すべき課題である。さて、これら2つのディアレクティケーは、前述のような区別とは異なり、使われ方、あり方の違いであって、強いて分類すれば、両方とも、積極的に肯定すべきものとして、学的探究にとっては有用なディアレクティケーである。それは、λογικῶςといわれる文脈での考察が、φυσικῶς (実在に着目した仕方) と言われる文脈での考察、すなわち、学的探究に有用であるとされる。しかし、それはどのようにしてであるか…

8. Wehrleの提出した論点は、なお、検討すべき多くの課題を含んでいるが、発展史的解釈を

とらない場合、特に、ディアレクティケーについて、どのような事態が起こるかについて、問題点を指摘しているにとどまるように思われる。彼は、未完に終わったこの論巧に取り組んでいた間、やがて（仕事を完成したら）、G.マーラーの交響曲第8番変ホ長調「千人の交響曲」を聴くことを心待ちにしていたという（p.xi）。いつになったら、我々は、マーラーの第八交響曲を聴くことができるであろうか。

Veni, Creator spiritus
 Mentis tuorum visita.
 Imple superna gratia,
 Quae tu creasti pectora.

文 献

- Bolton, R. (1990), "The Epistemological Basis of Aristotelian Dialectic," in D.Devereux and P.Pellegrin(eds.), *Biologie, logique, et métaphysique chez Aristote*, Paris, 185-236.
- Brunschwig, J. (1964), "Dialectique et ontologie chez Aristote," in *Revue philosophique de la France et de la l'Étranger*, 89e année, 1964, no 2, 179-200.
- Cleary, J.J.(1995), *Aristotle & Mathematics: Aporetic Method in Cosmology & Metaphysics*, Leiden.
- Devereux, D. (1990), "Comments on Robert Bolton's *The Epistemological Basis of Aristotelian Dialectic*," in D.Devereux and P.Pellegrin(eds.), *Biologie, logique, et métaphysique chez Aristote*, Paris, 263-286.
- Irwin, T. (1988), *Aristotle's First Principles*, Clarendon Press, Oxford.
- Lugarini, L. (1972), *Aristotele e l'idea della filosofia*, Firenze.
- Ockham, Guilelmus de, *Opera Philosophica et Theologica, Opera Philosophica III*(1978), *Expositio in Librum Praedicamentorum Aristotelis*(edidit Gedeon Gál), St.Bonavetura, N.Y.
- Ross, W.D.. (1924), *Aristotle's Metaphysics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, 2 vols., Oxford.
- Smith, R. (1997), *Aristotle Topics Books I and VIII*, Clarendon Press, Oxford.
- Wehrle, Walter E. (2000), *The Myth of Aristotle's Development and the Betrayal of Metaphysics*, Lanham, Maryland.

Retractatio de interpretatione Aristotelis

— Circa anti-explicationem philosophiae Aristotelis —

Kiyoaki AKAI

Beatus Wehrle ponit duas interpretationes; scilicet, de intentione Aristotelis in *Categoriis* et de distinctione duarum dialecticarum. In hac retractatione, consideratur proprietas harum interpretationum, praecipue, distinctionis duarum dialecticarum; scilicet, dialecticae aporeticae et dialecticae ad periculum.